

小学校における SWPBS の効果 2

—事例の実験デザインによる第1層支援の効果検討—

○大久保賢一 月本弾 野田航 田中善大 大対香奈子
 (畿央大学教育学部) (畿央大学教育学研究科) (大阪教育大学教育学部) (大阪樟蔭女子大学児童学部) (近畿大学総合社会学部)
 KEY WORDS: SWPBS・小学校・事例の実験デザイン

I 問題と目的

SWPBS における介入効果、特に第1層支援 (tier 1 intervention) に位置づけられる介入の効果は、Office Discipline Referral (ODR) が指標として用いられることが多く (Irvin et al., 2004)、群間比較デザイン、あるいは経年変化の分析などによって効果検証が行われることが多い。しかし、行動観察データを継続的に収集することが可能であれば、介入と行動変容との機能的関係についてある程度明らかにすることができ、行動変容のトレンドまで把握できる一事例の実験デザインを適用することは、SWPBS に関するエビデンスを蓄積していく上で有用であると考えられる。本研究においては、SWPBS の第1層支援として実施された介入の効果について検討することを目的とする。

II 方法

1. 対象

発表1と同様であった。

2. 学校目標マトリックス表と行動指導計画の作成

発表1と同様であった。

3. 手続き

ベースラインを測定した後、行動支援計画に従って、教職員が全ての児童に対して以下の手続きで標的行動を指導し、強化した。まず、全ての標的行動において、全校集会で対象校の校長が各標的行動の重要性と具体的内容について説明を行った。さらに、例えば「あいさつ」などは、関連する委員会に所属する児童のグループによって寸劇を通して実演が行われた。さらに、各学級において担任教師が中心となり、再度、標的行動に関する言語指示、モデリング、ロールプレイを実施し、日常場面で標的行動が観察された際は言語賞賛を行った。さらに教職員によって標的行動に関する記録を取り、各行動の変容をグラフ化し、校内に掲示した。全校集会においては、校長によって掲示されたグラフに基づき言語賞賛が行われた。なお、行動指導計画の作成においては、第1発表者がコンサルテーションを行い、データの整理やグラフ作成などは第2発表者が中心となり教職員を支援した。

III 結果

3つの標的行動全てにおいて、ベースライン期間と比較し

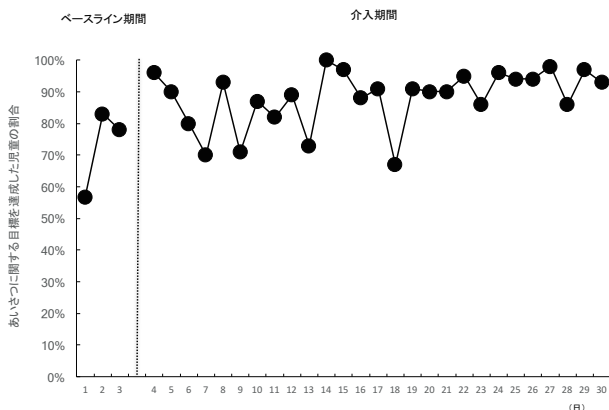


Fig. 1 「あいさつ」に関する目標を達成した児童の割合

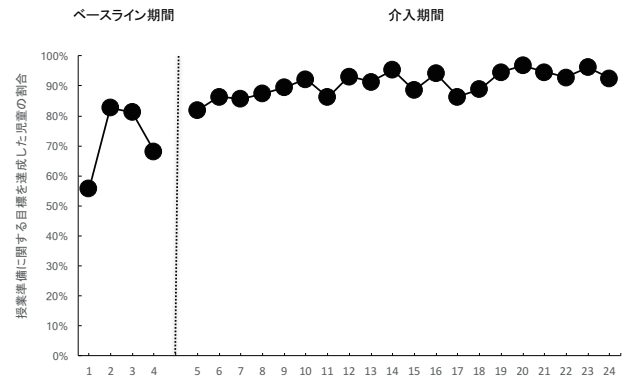


Fig. 2 授業準備に関する目標を達成した児童の割合

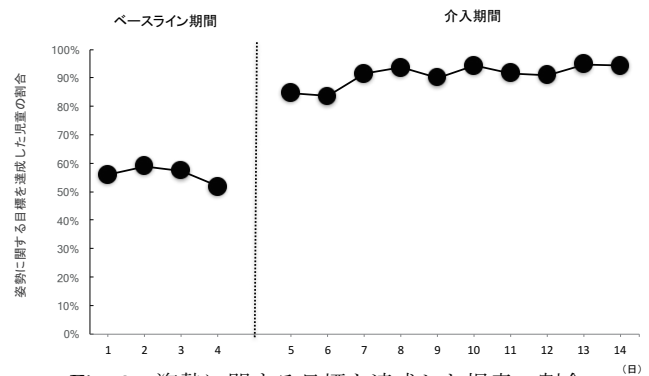


Fig. 3 姿勢に関する目標を達成した児童の割合

て介入期間の達成児童数の割合が増加した。あいさつは、介入期間において増加傾向がみられたものの、その後、不安定に推移した。教師からは「達成できていない児童が固定化されてきた」と報告がなされた。他の2つの標的行動は、介入直後から達成児童数の割合が増加し、その後も安定して高い水準を推移した。

IV 考察

発表1においては評価尺度に基づき SWPBS の効果を示した。本研究においては、直接観察に基づく一事例の実験デザインを適用したが、そのデータからも行動変容に効果があったことが示された。今後は、例えばあいさつにおいて報告された、第1層支援の効果が十分に示されない一部の児童に対する第2層支援や第3層支援など、児童のニーズに応じて順次支援を手厚くしていく校内システムを構築し、その実証的效果を検討していくことが課題である。

文献

Irvin, L. K., Tobin, T. J., Sprague, J. R., Sugai, G., & Vincent, C. G. (2004). Validity of office discipline referral measures as indices of school-wide behavioral status and effects of school-wide behavioral interventions. *Journal of Positive Behavior Interventions*, 6, 131-147.

(OHKUBO Kenichi, TSUKIMOTO Hazumu, OTSUI Kanako, TANAKA Yoshihiro, NODA Wataru)